

霊園に仙台ゆかりの人々をたずねて1

加藤多喜雄（1903～1991）
科学者として構想した仙台市の2つの施設

西大立目 祥子

「加藤三兄弟」。そう聞いて、東北大学教授だった加藤多喜雄さん、加藤愛雄さん、加藤陸奥雄さんの3人の科学者の名を思い浮かべる人は、仙台市民の中にいまどのぐらいいるだろう。ご年配の方なら、「いや、加藤四兄弟だよ」とおっしゃるかもしれない。仙台を離れられたが、四男の加藤磐雄さんもまた科学者だった。学都仙台が決して忘れてはならないご兄弟なのである。

しかも、多喜雄さんは化学、愛雄さんは物理学、陸奥雄さんは生物学、磐雄さんは地学と、理科4科目を兄弟できれいに分け合い活躍されたのだから、一体どんな環境で生まれたのだろうと興味が湧く。兄弟を導いたのは、中学で博物学を教えていた父、鉄治郎。植物に造詣の深かった父は、日曜のたびに息子たちを伴って植物採集に出かけたのだという。野山での自然観察が科学する心を育んだというわけだ。

ご長男の加藤多喜雄さんが亡くなって、今年でちょうど20年になる。多喜雄さんは、明治36年、千葉県大多喜町に生まれた。大正15年に東北帝国大学理学部化学科を卒業。東京工業大学助教授を経て、昭和19年に母校の工学部教授として仙台に戻られ、41年に定年退官するまで、工業分析化学の分野で多くの研究成果を上げ後進を育てられた。

学者としての業績はいうまでもないのだが、その名は、仙台市民にとっては仙台市科学館や仙台市野草園を構想した人として親しみ深い。戦争の爪痕が残る昭和20年代後半に、仙台市に働きかけて科学館の前身のサイエンスルームを立ち上げ、のちには科学館長として展示や実験、教師指導に力を注いで、仙台における理科教育の基盤をつくり上げた。

同時期に、仙台の野山が開発され豊かな山野草が失われていくのに危機感を抱き、弟の陸奥雄さんと計らって岡崎市長に丘陵地の保護を訴えた。これがきっかけとなって、昭和29年に大年寺山に野草園が生まれている。開園から50数年が経ち、若木や野草の移植された3万坪の園は、うっそうと樹木が生い茂り季節季節に可憐な花が咲く市民憩いの場となった。

「でもね、多喜雄先生の計画はもっと壮大なものだったんですよ。ここから太白山まで続くような自然観察園を造りたかったんです。お父様の影響ですね」と話すのは、長年に渡って園の充実を図ってこられた野草園名誉園長の管野邦夫さんだ。構想は20万坪。それほど広大な土地は手に入りようもなかった。開園30周年を記念し発行された「野草園の歩み」に寄せた文にも「狭いという心配は後まで残った。…植物の群落性が不十分である」とあり、口惜しさがにじみ出ている。科学者への道を決定づけた自然の野山での植物採集や観察を、何としても仙台の子どもたちに用意したかったのだろう。

墓碑は弟、陸奥雄さんの墓碑と並んで山並みを望む高台にある。いまも、ご兄弟で野山を散策しておられるのだと思えてくる。合掌。



西大立目祥子（にしおおたちめ・しょうこ）
フリーライター。地元学の視点で仙台市内のまちや
広瀬川について執筆している。著書に『仙台まち歩
き』（河北新報出版センター）、『仙台とっておき散歩
道』（無明舎出版）。